

【1】

あれから一体どれくらいの時が流れたのだろうか……木々のざわめきが心地よすぎずいふんと眠つてしまつていたのではないだろうか。気がつくと僕は林の中で仰向けになつて倒れていた。

風に揺れる木々の枝葉の向こう側には透き通つた青空が見えていた。地べたに直接横になつていたからだろうか、体に寒気を覚えた。ゆつくりと体を起こす。少し頭がくらくらする。一体どうしたと言つたのだろうか。ちゃんと朝食と昼食を摂らなかつたから貧血でも起こしたのだろうか？ だとしたら人生で初の体験をした事になる。貧血で意識を失うなんて……。自分の体はそこまで柔かつたのだろうか。

ゆつくりと辺りを見回すと自分の周りを雑木林が取り囲んでいた。日はまだ高くどうやらあれから大した時間は流れていないようだ。携帯を開いて時刻を確認すると十七時半を回つたところだった。

今からダッシュで行けばぎりぎりレッスンに間に合うかもしれない。もう一度辺りを見回したところでのその異変に気がつく。あれ？ 石像がない。すぐ目の前にあつたあの巨大な半馬人の石像がなくなつてたのだ。おかしいな……ここら辺にあつたはずなのに……。それともあの石像を見ていた時点ですでに意識が飛んでたのだろうか？ 夢だった？ まあ……どうでもいい。とにかく駅に向かわなくちゃ！ よういせと立ち上がると制服についた土を払つたが真っ白なスーツについた土はなかなか汚れが落ちない。良く見えない

がきつと体の後ろは悲惨なことになっているのではないか。さすがにこれで電車には乗れないよな……。なんとなく寒気を覚えながらもズボンのおしりを念入りにはたきスーツの上着をぬいだ。

よし！かばんの中にスーツを畳んで詰め込むとバイオリンケースも一緒に持ったところで歩き出そうとした足がびたりと止まった。ないのだ。先ほどまで歩いてきた石畳の道が。な……。なんだよ……。一体どうしたことなんだ？石像といい道といい、どこへ消えてしまったんだ？必死であたりをみまわすがそれらしきものを見つけない。道が冷たい。それに……。5月だというのに……。こんなに寒かったのだろうか……。風はそんなに冷たいが空気が体が冷たい。天気はこんなに良いのに……。なんだか妙だ。何かしらの違和感を覚えている。少し背中に寒気を覚える。

最悪、バイオリンのレッスンは諦めてでもいいからまずはこの林から出よう。一度深呼吸すると荷物を持ち直し木々が深そうなどころはさげなるとよく明るい道を選んで進むことにした。正直石畳の道がないと本当に雑木林のワイルドな世界を制服で歩くのはきつい。もう汚れなんて気にしていられなかった。ただただひたすら林の出口を探して歩き続ける。学園の敷地内の雑木林で迷子だなんてなんだか情けないが歩き続けていればいつか何かしらの建物が見えてくるに違いないはずだ。

学園の敷地としては幼稚園舎と大学棟、初等部、中等部、高等部をざっくりと四等分して、敷地のど真ん中には大きな時計塔がある。いずれどれかしらの建物に遭遇するだろう。でなければ学園の敷地をぐるりと囲む高い壁にぶち当たるはずだ。壁を見つけたらそれを伝えていけば必ず出口が見えるに違いない。やがて視界の先に林が途切れて開けた世界が広がっているのを見つけた。やった！出口だ！……走り出し

たい気持を抑え足場の悪い林の中を何とか進むと林の出口の手前まで来て足を止めた。林の出口に広がっていたのは今竹人が立っている場所から緩やかに下るように広い、広大な草原が広がっていた。思わず体が硬直し息を飲む。

……え？こんなところ、学園内にあつたっけ？その草原は地平線の回ころまで続いているようだった。草原のとどこどこにいくつか小さな小道が東西、南北に伸びているのがわかる。大学にこんなでかい施設があつたのだろうか？

農学部とか何か？いやいやいやいや、聞いたことないぞ、うちの学園にこんながあるなんて……。いづだったか家族で北海道に旅行したときにみた景色にどこことなく似ていた。ただ富良野で見た。パッチワーク畑の模様とは違い一面が稲のような青々とした緑色をしていて風が吹くとその通り道が目で見えてわかるほどの美しい景色でもあつた。が草原の土に水は張っておらず稲ではないらしい。草の高さは竹人の身長ほどある。僕は頭でも打つて夢を見ているのだろうか。ためしに思い切り頬をつねってみた。

「いたー！」

痛すぎる。やっぱり夢じゃないのか……。草原に建物らしきものは見当たらない。だが、道があるのだから人がいるのは間違いないさそうだ。困ったなあ。ズボンポケットから携帯を取り出し開く。

あれ……。圏外？！それに……。時間がさつき見たときから変わってないよう……。もしや携帯がフリーズした？

慌てて操作してみるがメニューなどは正常に開けるようだ。壊れちゃったのかなあ……。ためしに自宅にコ

ールしてみるが接続音さえ鳴らない。本当に圏外のようなようだ。と、目の前を蝶がふわりと舞った。

！っ思わず息が止まる。桜の花びらのような淡いピンク色の翼を持つ美しい蝶だ。

大きさはアゲハ蝶くらいあるのではないだろうか。結構大きい。こんな蝶を見たことがない。羽を羽ばたかせるとまるでガラスでできているのではないかとさえ異常な程の透明度があった。やがて蝶は林の中へと消えていった。なんだったんだ…今の。新種を発見してしまった？それとも…こは、実は大学の研究施設の敷地で何か新種のを開発中？……にしては無理があるか…。

敷地が異常に広すぎる。鎌倉市一個分以上はあるよな…どうみても…。何が起ったのかわからない。とりあえず大きくわざとらしいため息を一つついた。とにかく誰かに会って出口を教えてもらわなくっちゃ！

背の高い草を掻き分けてすすむとやっと思道にでた。石畳も舗装もされていない、ただの道だ。やっ  
と一人一人が歩けるぐらいの細さだが道があるだけ有難い。これ以上制服が汚れたらもはや白ではなく真っ黒でぼろぼろになってしまいうだ。道は正確なまでに真っ直ぐに続き地平線のかなた向こうで消えている。一体どれだけ歩けばいいんだろう…。夢なら早く覚めてほしい。そう願いながらなんとか一歩一歩歩き出した。

どれくらい歩いただろうか。少なくとも一時間以上は歩いていると思うが。途中道の横で座って休憩しては歩き出しの繰り返しを続けるも一向に景色が変わることはない。

ただ、振り返ると最初に出てきた林……いや、実は小高い山だったことが判明しそれが追いかけてくるようにぜんぜん距離が縮んでいないように思え嫌気が差し途中から振り返るのをやめてしまった。にしても……これだけ歩いているのになんで日が暮れないんだろう……。5月とはいえもう夕方の6時はさすがに過ぎていくはずだ。太陽は見えるが位置も変わっていないように見えた。

「はあー疲れたー！」

誰もいないのを知ってか知らずか自分でも少しびびくりするぐらい大きな声を出すと道の脇にどつかりと乱暴に座った。困ったなあ……。本当、ここはどこなんだよ……。それにおなかも空ひてきた。

本当なら今頃はレッスンが終わってコンビニで何か買ってつまんでいる頃なのかも知れない。本当に一体どうなってしまったんだろう。しかし誰もその問いに答えてくれるものはない。歩けど歩けどどこをどう向かっているのかもわからない。だんだんといらいらししている自分に気がついた。

ここはどこなんだ！何県何市何区何町何番地なんだ！……心の中で叫ばずにはいられなかった。再びゆつくりと立ち上がり進もうとした方向を目を細めながら眺めた。本当にこっちでいいのか？。確かにあの森の中に戻るつもりはない。けれど、本当にこっちでいいのだろうか？この先には一体なにがあるのだ

ろう。漠然としすぎたこの広大な草原の先には何がある？しばらくそこに佇んでいると…何か地響きのよような音が遠くのほうで聞こえた。

振り返ってみると森の麓のほうに大きな土ぼこりが立っているのが見える。何かが来る！目を凝らしてみても僕はまた言葉を失った。

こちらへ向かってくるのは、馬の大群…。二、三十頭はかりだろうか。何か叫んでいるようにも聞こえる。何かがおかしい。そう。何かがおかしい。一瞬その光景を正覚に認識できず軽くめまいを覚えた。

下半身は馬なのだがよくみると上半身が人間で手にはなにか剣か棒のようなものをもつて振り回しながらこちらへと駆けてくるではないか！大群の二頭が僕を見つけると何かを大声で叫び一層速度を上げてやってくるように見えた。

う…

「うわあうううううううう…！」

そう叫びながら僕は全速力で半馬人がやって来るほうとは反対の道を走り出した。背後から何か飛んでくる気配が感じた、次の瞬間僕の行く手数メートル先に石の塊が飛んできた。あんなの頭に当たったら死んじゃうじゃないか…！」

「まて…！」

「逃がすな！捕まえろ…！」

背後から半馬人たちの怒鳴り声が聞こえる。ひーっ…！やっぱり追っかけてくる…！つかまったらどう

なるんだ!! 周りには草原と道以外何もないし逃げ道も戦う術も何もない。ただ出来る事はひたすら走って逃げることくらいだ。しかしとうとう半馬人たちは手を伸ばせば僕を捕まえられるんじゃないかという近距離まで迫ってきた。どうすることもできない! 万事休す! こうなったら! ! !

半馬人の一頭が手を伸ばそうとしたところで僕は進んでいた道の真横の草地の中に身を投げ込んだ。あとは無我夢中で背を低くして草むらの中を掻き分けて逃げる。数十メートルぐらい進んだところでぴたりと止まるとそのまま身を丸くかがめた姿勢で静止し必死で息を殺した。

呼吸が乱れ心臓がバクバク言っているがなるべく見つからないようにしなければならぬ。地面の土をただじつと見つめたまま耳に神経を集中させた。どのくらい時間がたつただろうか。

いくら待っても半馬人が近づいてくる音や気配がない。虫一匹の鳴き声すら聞こえず、ただ、たまに吹く風が葉をザワザワと静かに揺らす音だけが聞こえていた。

.....

あ.....れ?

迫ってこない?

呼吸が正常に整ったところで、ゆつくりと、恐る恐る顔を上げてみせる。そこには森を出た時とさほど変わらぬ広大な草原がただただ風に揺れながら広がるばかりの光景だった。えっさっきのやつら、一体どこに消えたんだ? まさか隠れて僕が姿を見せたところをまた襲うきじや? !

慌てて左右前後を見回すがなんの気配も感じなかった。静かに立ち上がる。

一体なんだったんだ？暫くの間そこに黙って立ち尽くしたが何の変化も起きない。本当に、一体なんだったんだろ……。とりあえず、どうにか助かったらしい。もう汚れを気にする事も諦め、かつては真っ白だったスーツについた土を軽く手で払い荷物を持つと、今度は前方に見えた別の道まで出て、ただひたすら、森とは逆の方向へと歩き続けた。

この先に何が待ち受けているかなんて事も当然予想できません。